

「ゴー・ファースト 潜入捜査官」 ★★★

2009（平成21）年8月13日鑑賞<アスミック・エース社内DVD試写>

監督：オリヴィエ・ヴァンホーフスタッド
マレク（パリ警視庁探索出動班の捜査官）／ロシュディ・ゼム
ジャン・ドー（マレクの上司）／オリヴィエ・グルメ
メコ／ジャン＝ミシェル・フェット
リュシアン（麻薬密売人）／ジル・ミラン
グラディス（マレクの助手の美女）／カタリーナ・ドニ
ンジャイ（リュシアンの腹心）／エヴァリスト・カエンブ・ベヤ
2008年・フランス映画・89分
配給／アスミック・エース

<ゴー・ファーストとは？クルマ好きは必見！>

フランス映画でありながら「GO FAST」という英語の邦題をつけられたことに、オリヴィエ・ヴァンホーフスタッド監督をはじめ、プライドの高いフランス人の多くは怒っているかもしれない。だって、イラク戦争への対応をめぐる終始ブッシュ大統領と対立したフランスのシラク大統領の姿をみれば、そしてまた本作で逮捕された麻薬密売人リュシアン（ジル・ミラン）が「弁護士を呼べ！」と叫んだことに対して、担当の警察官が「ここはアメリカじゃないんだ！」と一蹴する本作のワンシーンをみれば、フランス人のアメリカへの対抗意識がありありと見えるから。

それはともかく、「GO FAST」とは直訳すれば「早く行け！」。しかしそれだけでは何のこともサッパリわからないが、俗語では覚醒剤・スピードを指すらしい。しかし本作で通称「GO FAST」と呼ばれているのは、パリ→スペインのマドリード→スペインのマラガ→モロッコのケタマを結ぶ麻薬密売ルート、時速200km以上のスピードで駆けるプロの運び屋のことだ。邦題はサブタイトルとしてさらに親切に「潜入捜査官」までつけたから、タイトルだけでそんな麻薬密売組織の中に潜入捜査官マレク（ロシュディ・ゼム）が入り込み大活躍する物語だということがわかる。

本場フランスでの公開は、2008年カンヌ国際映画祭パルム・ドール受賞作品『The Class』（08年）に次ぐ初登場第2位だったが、ポルシェ、アウディ、BMWなどの名車が高速で走り抜けるシーンが次々と登場する本作は、クルマ好きには必見！

<潜入捜査のリアルさは？>

マフィアから警察官へ、警察官からマフィアへ潜入する2人の対照的な若者を主人公とした香港映画の名作が『インファナル・アフェア』3部作（02～03年）だった（『シネマルーム3』79頁、『シネマルーム5』336頁、『シネマルーム7』223頁、『シネマルーム17』48頁参照）が、「潜入捜査官」というサブタイトルがついた本作における主人公マレクの潜入捜査のリアルさは？

マレクが所属するのは、パリ警視庁探索出動班、通称BRI。映画冒頭、そんなマレクが相棒と2人でパリの宝石店を襲撃するシーケンスが登場するが、これはマレクが裏社会での実績をつけるためのお芝居らしい。もっとも、ストーリー全体が89分に凝縮されているうえ、フランス映画特有の説明不足(?)があるため、この冒頭のシーケンスからそんなポイントをつかみ出すにはかなりの集中力が必要だ。そんなマレクの潜入捜査のリアルさを、『インファナル・アフェア』と比較してみれば？

<探索出動班から麻薬取締局へ。そして遂に>

そんな潜入捜査の切り札としてマレクを温存するため、麻薬密売に手を染めるリュシアン一味を一網打尽にする計画の実行はマレクの上司ジャン・ドー（オリヴィエ・グルメ）自身が指揮することに。ところが、ある日ある手違いによってジャン・ドー以下の監視班は、リュシアンの一味に急襲されて全員殺されてしまったから大変。そんな大量警官殺しの罪でリュシアンは1度は逮捕されたが、フランスでもアメリカと同じように証拠がなければ公判の維持は不可能なため、リュシアンは釈放されることに。

一人残されたマレクの怒りは収まらないが、そんなマレクの怒りと潜入捜査官としての能力を見込んで声をかけてきたのが麻薬取締局。そこでマレクに与えられた任務は、モロッコからスペインのマラガに持ち込まれたドラッグを運ぶドライバー、「ゴー・ファースト」として敵地に潜入することだ。さあ遂に潜入捜査実践の時が。そしてリュシアンへの復讐を遂げる時がやってきたが・・・。

<本作の見どころは？>

「ゴー・ファースト」として潜入捜査をするためのさまざまな訓練を積んだマレクに、やっとマレクと同じく「ゴー・ファースト」として雇われた男たちと対面する日がやってきた。スペインのマラガからパリまで大量の麻薬を輸送する「ゴー・ファースト」の任務に、マレクと共に従事するのは、あの日マレクの上司ジャン・ドーらを全員射殺した憎きリュシアンとその腹心ンジャイ（エヴァリスト・カエンブ・ベヤ）たちだ。マレクからの通報を受けて高速の入口などに大量に配置された麻薬取締局のスタッフは、この機会に麻薬密売組織の壊滅を狙ったが、さてその首尾は？

<「ゴー・ファースト」の助手となる美女は？>

本作の本来の見どころはそこだが、実は私がそれ以上に注目したのは「ゴー・ファースト」の助手役として共に車を走らせる美女グラディス（カタリーナ・ドニ）。グラディスを演ずるカタリーナ・ドニは『TAXI 4』（07年）で映画デビューを飾った美女で、本作は2度目の映画出演だが、男顔負けのドライビングテクニックに圧倒される。

さらに注目すべきは、彼女の秘密。リュシアンはマレクと目を合わせた時から「どことなく気に入らない奴だ」という印象をもっていたが、「ゴー・ファースト」として麻薬を輸送している真っ最中にさまざまな記憶が1本に繋がり「マレクはあの時の警察官だ！」とはっきり思い出したから大変。もっとも、マレクの運転する車の助手席に座る男にマレクの身分が伝えられても、直ちにマレクを始末することができないのは当然。だって200km以上のスピードで突っ走っている車の中でマレクを殺せば、たちまち車は暴走してしまうから、助手席の男の命もマレクと運命共同体。そんな緊迫感の中で暴走するマレクの車は遂にある車と衝突しひっくり返ってしまうが、やっと車が停止した中、負傷しながらマレクを射殺しようとした助手席の男を先に撃ったのは、うつむいてこの男を射殺したため見事な胸をマレクと観客に堂々と露出したグラディス。あれ、あれ、この美女の正体は一体ナニ？

<カー・アクションの限界は？>

フランスでは『TAXI』シリーズ、『トランスポーター』シリーズ、などのカー・アクションを売りものにした映画が盛んだが、これはひょっとしてリュック・ベッソン監督がそういう方面大好き人間のため？なるほどそういえば、本作の提供もリュック・ベッソン率いるヨーロッパ・コープによるものだ。

『007』シリーズの最新作『007 カジノ・ロワイヤル』（06年）や『007 慰めの報酬』（08年）のカー・アクションもすごかった（『シネマルーム14』14頁、『シネマルーム22』88頁参照）が、動体視力の衰えてきた私の目には本作を含むあまりにスピーディーなカー・アクションの展開は少しいらい。本作におけるカー・アクションシーン撮影の苦労話は、プレスシートの「捷破りの製作準備―法を犯す！」「フランス警察の協力」「カー・アクションの限界に挑む」などで詳しく書かれているが、それを読まなくてもスクリーン上を疾走する車をみていればその苦労は十分伝わってくる。

カー・アクションの限界とは？そんなことを考えながら本作を楽しむのも、スピード狂のあなたには一興かも？